

つて來られたに拘らず、なほ日本の特色を認めて之を稱揚される所に、翁の優れた人格が認められると思ふ。翁は殊に我が日本の國柄に甚大なる興味を持たれ、來住以來日本に關する文學的方面の古書を研究する外なほ神社研究に力を致され、又船名の特殊研究をして本國英吉利の學界に紹介する等、我が日本を海外に紹介する事に特殊の盡力をされた。我々の明治聖徳記念學會紀要にも時々熱心に筆を揮ひ、又同情して、色々骨を折られた。然るに此の忠實にして熱心なる日本紹介者の翁が、客年十二月遂に病の爲に逝去されたのは誠に残念な事であつて、斯かる人物は今少し生きてゐて貰つて、なほ十分に力を盡して戴きたかつたと哀悼の感に堪へない。

我れ將に兜を脱がんとす

宮内省掌典 星野輝興

私の談話の題は「我れ將に兜を脱がんとす」といふのであつたが、電話の間違ひで、通知狀には「彼れ將に兜を脱がんとす」とあるから驚いた。これは正に「彼」と「我」との相違である。恐らく此の事を翁が知られたら、例のあの大きな顔を上向きにして、ハテなど考へられる事であらう。

翁には京の下賀茂社の御阿禮の時に始めて面會した。當時私は官命を帯びて賀茂祭を研究に行つたのであるが、御山

から下りて社頭まで來ると、關目社家の脇に黒木綿の紋附に小倉の袴を穿いた一高生のやうな姿の外人が居た。それが即ち本尊美翁で、御互ひの紹介が濟むと直ぐ、問題を出して、「二つの社殿があるお宮は必ずお二方の神をお祭りしてあるのが定則である、上賀茂も二社殿であるから、祭神は二柱であらう」と質問された。それで私は、「そんな事は無い、理由は色々あるが、二社殿の双方に何れも神を祭る場合は、荒魂と和魂とである筈だ」と答へると、翁は黙々として聞いてゐられたが、東京へ歸ると直ぐに禮狀が來た、それがチャンとした候文體で、餘り字の間違もないので驚いた。そして中に一枚の寫眞が封入してあつた。見ると一神社三社殿の寫眞である。それについては別に何とも文句は書いてなかつたが、明かに私の説に對する抗議である。それで其の後も色々話し合つたが、或る時夜の十時頃になつて、關屋宮内次官から電話があつて、明日是非本尊美翁に會つてくれとの事であつた。面會時刻は三時の約束になつてゐたので、其の前に和服を着て出かけると、知人が見咎めてどういふわけかと聞いた。それで私は、イヤ自分が會て京都で翁に會つた時は、朴齒の下駄を穿いて、白い紐の着いた羽織を着て、都大路狭しと濶歩してゐた、自分は宮内省の神主である、外人が和服を着てゐるのに、洋服で訪問は出來ぬではないか、と云つて辯解した。それで約束の時刻に、指定された三好邸へ行つて、案内を乞ふと、翁は奥まつた所の廣い日本間にゐたが、其の風體を見ると、繡紋の羽織に、茶系統の澁い着物を着てゐられる。恐らく茶の堅縞の節袖であつたかと思ふが、とにかく澁い身なりである。そして其處へ女中がコーヒーを持つて來て、客の私に薦め、次いで翁の前へも持つてゆくと、翁は「イヤ私はお番茶を頂きます」と云はれたので驚いた。其の席でも例の一神社三殿の話が出て、三殿中の一殿はお祭をする所であることを告げて其の證據資料をも呈上した。すると翁は非常に感謝されたが、次に堅折にした大きい紙に書いた宣命文を持出して滔々と讀

み出して、假名も何もないものを殆ど問題もなく読み通された。こんな人は日本人にも餘りない。而も口調といひ態度といひ、悉ひな神職以上であるから、これにも驚いた。それから祭文について二三の質問をされたので、それに答へて、もう用済かと思つてゐると、和綴の古事類苑を持出して、此の賀茂祭の處に疑點があると、其の項目を指摘して、解釋を求められた。それは行列中の採物に關するものであつたが、私が其の説明をすると、翁は「さうでない、其の説明には、斯かる缺點がある」と云つて、自分は明朝八時三十分に出立するから其の前に回答を聞きたいと云はれた。それで自分は此の回答が満足に出来ねば日本神道家の面目に關すると思つて、早速夜を徹して調査し、曉の六時半に至つて漸く自ら満足する研究結果を得たので、七時前に再び三好邸を訪うて本尊美翁に其の意見を述べた。ところが其れから役所へ出て次官に其の顛末を告げると、意外にも其の前夜に翁から次官の所へ電話があつて、これで多年の疑問が愈々氷解した、星野氏から明かに返事が来るに相違ない、といふ感謝の言葉があつたといふ次官の話であつたので、私はそれを聞いて、若し返事が出来なかつたらと思はず戰慄した。その後高松宮別當の石川氏に聞くと、石川氏が殿下のお供で航海中、本尊美翁がやはり同船してゐて、例の和本の古事類苑を指さして盛に質問し、石川氏が専門家ではないからと斷つても聞かないで責めぬいたので苦んだと事ふ事であつたので、益々戰慄を感じた。問題は小さいが、一旦疑問が出ると、何處までも押し詰めて聞きたゞさないと承知しない翁の性格には敬服の至であつて、私などは翁によつて教へられる所が多かつた。實に翁の如きは、國學・神道に籍を置くものにとつて戰慄すべき先輩であつたと云つてよからうと思ふ。